

奈良・薬師寺出土の “イカロスの翼”から紐解く グライダーと戦前の日本

奈良大学 文学部 文化財学科教授
岩戸 晶子

薬師寺からイカロス？

世界遺産にも登録されている薬師寺（奈良市）は、和銅3年（710）の藤原京からの遷都にともなって平城京内に造営され、今も法灯を保つ名刹です。しかし、火災によって当初の建物のほとんどは失われ、東塔しか現存していません。東塔は110年ぶりに解体修理が行われ、一昨年春その完成を祝う落慶法要が行われたばかりですが、薬師寺では昭和の時代から失われた堂塔を再建し、当初の伽藍の復興を目指してきました。筆者が令和4年度末まで勤務していた奈良文化財研究所（以下、奈文研）では失われた堂塔に関するデータの提供と、学術的な研究を目的として伽藍内の発掘調査を継続的に実施してきました。

平成24年（2012）、薬師寺の伽藍北方の十字廊跡でおこなわれた奈文研による発掘調査（平城第500次調査）において、不思議な破片が4点出土しました（図1）。復元形が円形をなすことから、発掘現場では軒丸瓦の一部と認識され、出土瓦の

整理・調査をおこなう奈文研内の研究室に持ち帰られました。しかし、洗浄後の観察の結果、それらは瓦ではなく、特別な意匠が表された焼きもの、陶製品であると判断されたのです。また、遡ると薬師寺の伽藍北西部を調査した昭和49年（1974）の第88-21次調査や昭和53年（1978）の第103-23次調査でも同様の破片が1点ずつ出土していたことも確認されました。これらあわせて6点の破片（以下、出土破片と略記 図2）を併せ見ると、円盤に翼を広げた人物が横向きに空を飛ぶ姿が浮き彫りで表現されること、その文様は手彫りではなく型に粘土を詰めて表されていることがわかりました。「翼を持つ人物が空を飛ぶ」といえば、ギリシャ神話の「イカロスの翼」の逸話を思い起こす方も多いでしょう。ミノス王のために迷宮ラビュリントスを築いた職人ダイダロスは、後に王の怒りを買って息子イカロスと高い塔に幽閉されてしまいました。窓にやってくる鳥の羽を集め、それを蠟で固定して翼を作り、塔からの脱出を試みます。父は息子に「蠟が溶けてしまうから太陽

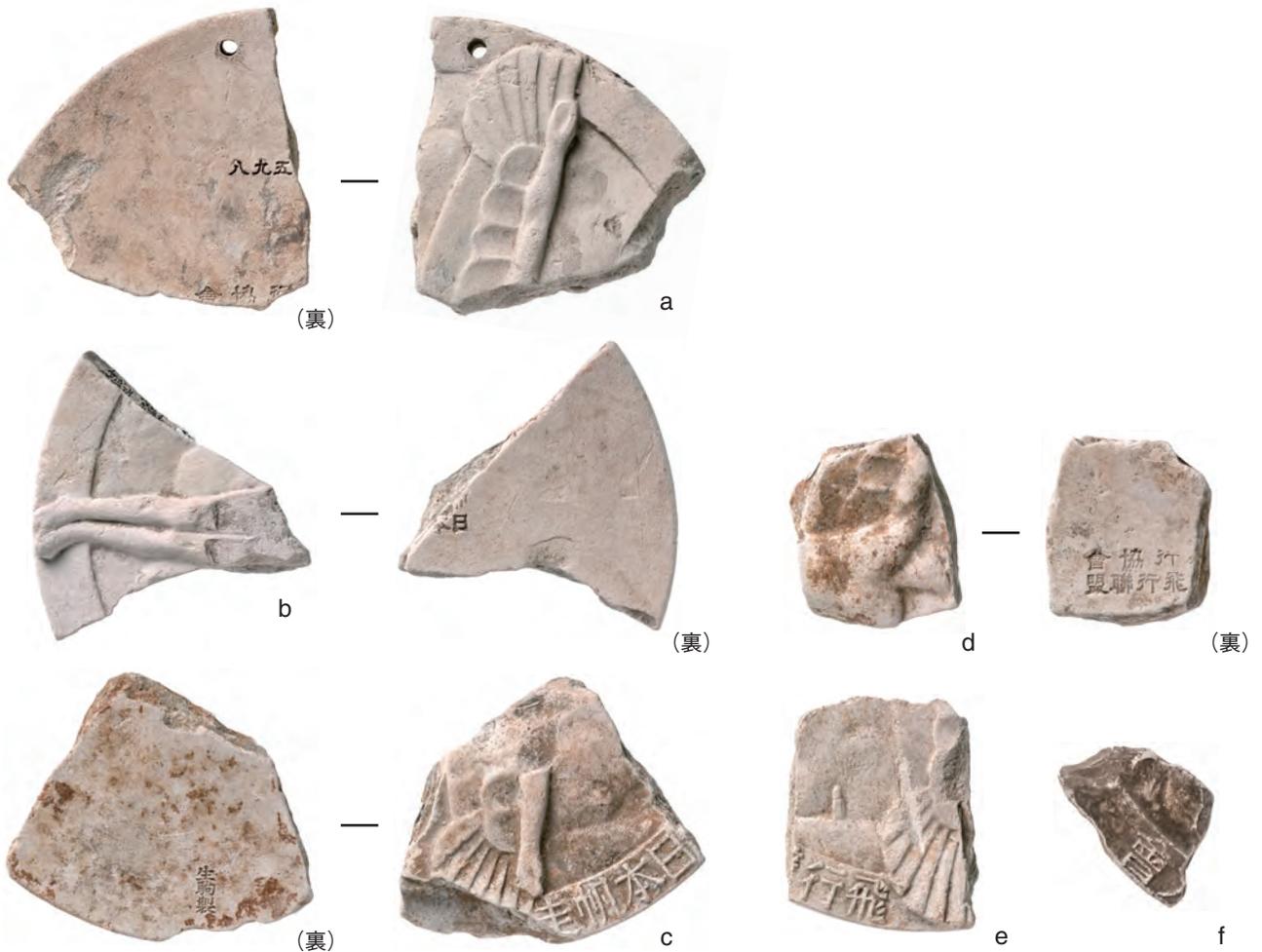


図2 薬師寺出土品

(図2-c)の文字が読み取れました(□は部分的に残る文字)。いったいこれは何なのか？イカロス文様の焼きものがなぜ仏教寺院である薬師寺から出土したのだろうか？謎が謎を呼ぶ状態でした。

インターネットで手掛かり発見

そんなある日のこと、業務時間を終えた筆者は、ふとこの出土破片にあった表裏面の文字を文字通り「ググって」みたのです。いろいろなやり方で検索していくうちに、カナダ・トロント日本商工会のホームページに掲載されていた伊達のり子さん(以下、のり子さんと表記)による随筆に行きあたりました(HPリニューアルのため現在は閲覧不可能)。その随筆には桐箱に納められた「第1回全日本帆走飛行競技大会(以下、第1回大会と略記)」の金属製メダルの写真(図3)と、

のり子さんの御母堂である伊達(旧姓 野口)種子さん(1921-1999 以下、種子さんと表記)と第1回大会の関わりについて書かれていました。この随筆に出逢えたことが、出土破片の謎解きの扉を開くきっかけになりました。というのも、第1回大会の金属製メダルのデザイン(図4)と出土破片のデザインには多くの共通点があったため、この出土破片が戦前の帆走飛行、すなわちグライダーの大会に関するものだと推定できたからです。桐箱に貼られた当時のシールから、裏面の「生駒製」の文字は現在も大阪で営業を続けている生駒時計店で製造されたことを示すことがわかりました。しかし、文様の共通性だけでは、第1回大会の桐箱に納められた金属製メダルに対し、焼きものである出土破片はメダルに代わる公式のものとして制作されたのか、お土産ものなど非公式のもの



図3 桐箱に保管されていた金属製メダル
(伊達のり子氏旧蔵、現在は奈良文化財研究所所蔵)



図4 金属製メダルの表・裏

して制作されたのか、判断つきません。そこで、さらに詳しく調べていきました。

しばらく、コロナ禍でもあり、のり子さんや間を取り持ってください航空史家の古谷眞之助氏他とメールのみで情報をやり取りするなか、第2回全日本帆走飛行競技大会（以下、第2回大会と略記）の陶製プレートが日本航空協会に所蔵されていることが古谷さんを通して知らされました

(図5)。出土破片の完形品がついに発見されたのです。その後、日本航空協会の荻田重賀部長のご教示により同協会が所蔵する「航空遺産」内に、陶製プレートのほか、金属メダルを使用した第1回大会の委員章(図6)や第1回および第2回大会のプログラム(図7・8)なども保管されていることもわかりました。

陶製プレートの完形品と出土破片は同じ型に



図9 第2回大会開会式の様子

第二回全日本帆走飛行競技大会

昭和十三年八月十七日ヨリ十九日間
生駒山並ニ大阪陸軍飛行場

主催 帝國飛行協會

後援 日本帆走飛行聯盟

大阪毎日新聞社

東京日日新聞社

逓信省航空本局

陸軍航空本部

厚生省衛生部

文部省

後援 陸軍航空本部

逓信省航空本局

東京日日新聞社

大阪毎日新聞社

日本帆走飛行聯盟

帝國飛行協會

主催 帝國飛行協會

後援 日本帆走飛行聯盟

逓信省航空本局

陸軍航空本部

厚生省衛生部

文部省

後援 陸軍航空本部

逓信省航空本局

東京日日新聞社

大阪毎日新聞社

日本帆走飛行聯盟

帝國飛行協會

主催 帝國飛行協會

後援 日本帆走飛行聯盟

逓信省航空本局

本大会ノ目的

本邦ニ於ケル高性能滑空機及ビ優秀ナル滑空士ニ對シテ新鋭特ニ距離飛行記録ヲ樹立スル機合ヲ與ヘ且ツ滑空機操縦技術及ビ工作術ノ向上ヲ圖リ國家總動員ノ秋ニ際シ更ニ滑空指導精神ノ作興ニ資セントス

入場式

八月十七日午前十時 大阪陸軍飛行場
役員委員着席
参加者入場

皇居通拜 大阪城東遊樂學校
ブラッスバンド

國旗掲揚 (國歌齊唱)

支那事務長將士(一分間黙禱)

優勝杯返還

授賞式

祝詞

祝賀

祝賀

祝賀

祝賀

祝賀

祝賀

祝賀

祝賀

祝賀

参加滑空機並ニ参加滑空士

伊藤式 C2 型 青村 登久一

同 渡邊 宏

同 久田 善夫

伊藤式 C5 型 島 安博

同 小田 勇

同 大和 澤三

同 利根川 潔

同 中野 徳兵衛

同 中野 秀雄

同 吉原 清治

同 平松 時善

同 山本 勳

同 大久保 正一

同 肥田木 文夫

同 清水 六之助

同 大牧 雅四郎

同 志鶴 忠夫

同 同

同 同

同 同

同 同

帝國航空會

帝國飛行會

公開飛行

午前十時半—正午

午後一時

午後二時

午後三時

午後四時

午後五時

午後六時

午後七時

午後八時

午後九時

午後十時

午後十一時

午後十二時

午後一時

午後二時

午後三時

午後四時

午後五時

午後六時

午後七時

午後八時

帝國航空會

帝國飛行會

られ記念ハガキが販売されているあたり、多くの集客が見込める一大イベントだったようです。昭和12年(1937)には朝日新聞社パイロットの飯沼正明が同社の訪欧機である神風号で東京・ロンドン間を当時の世界最速記録で飛行したというニュースには日本全体が熱狂し、航空に対する関心や注目が大変高まった時代だったのです。

ただし、グライダーの普及には当時の軍部の思惑や国策との関係もあったことは見逃せません。第一次世界大戦(1914-1918)で飛行機が軍用として初めて本格的に使用されると、日本の軍部もその戦略的重要性に着目します。昭和6年(1931)の満州事変後には愛国飛行機献納運動として、広く寄付金を募ったり、寄付金付の愛国切手や航空愛国運動の絵はがき(図10)を販売したりして、飛行機購入費用を陸軍・海軍に寄付する運動が全国的に展開されました。第1回大会の委員章(図6)において、メダル上部の長方形部材には上段に「愛国」、下段に「全日本帆走飛行競技大会」の文字が見えますが、「愛国」は「航空愛国運動」を指すものでしょう。同時に、航空への国民、特に若い層への興味や関心を喚起するため、児童や青少年に対して軍人が飛行機の重要性を説いたり、昭和12年(1937)には中等学校3年(16歳)の教育課程において滑空訓練を課すべく教員養成や教材機の開発なども始められたりしています。

第1回大会プログラム(図7)の裏面に印刷された文章「帆走飛行について」はグライダーの重要性を強くアピールするもので、当時のグライダーに対する認識や期待をよく示すものです。それによれば、昭和15年(1940)に予定されていた東京オリンピックではグライダーが正式種目になる予定だったことが謳われ(実際には開会されず)、グライダーは機材が安価であること、発着に本格的滑走路が不要であること、引火する燃料がないため安全性が高いことなど航空スポーツとしての適性が強調されています。グライダー競技大会の実施は、表向きには航空の普及と技術の向上を掲げていますが、スポーツとしての側面に加え、将来の航空による国防への意識を高める意図が併存していたと言えます。

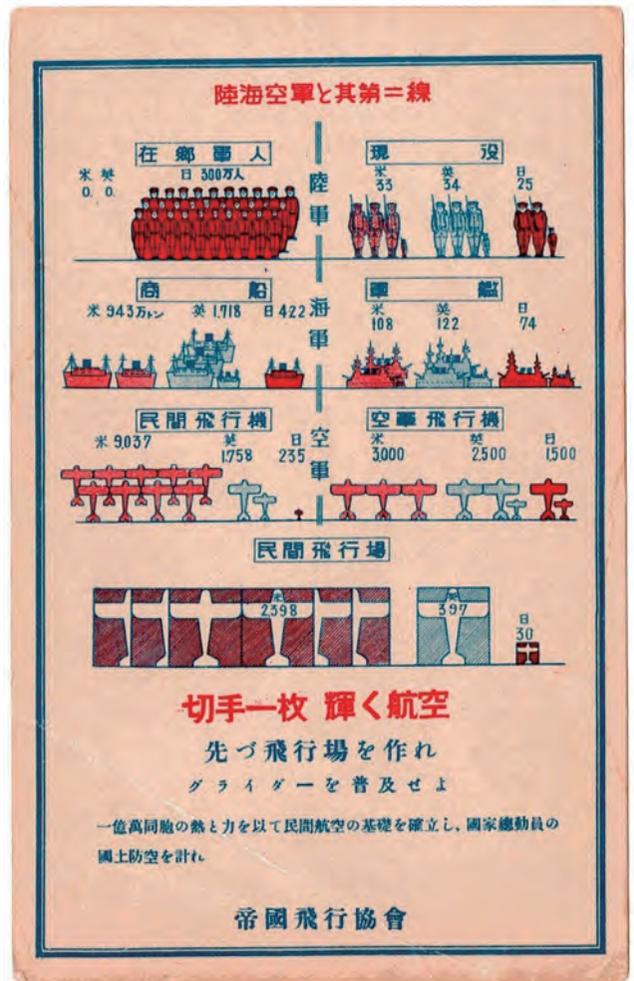


図10 航空愛国運動絵葉書(筆者所蔵)
〔「グライダーを普及せよ」の一文がある〕

なぜ薬師寺から発掘された?

出土破片が第2回大会のために公式に準備されたものであることはわかりましたが、グライダー大会のための陶製プレートの破片がなぜ奈良の薬師寺で出土したのか、その謎についてもみていきましょう。出土破片をよく観察すると、いずれも素焼きで釉薬をかけて仕上げ焼成する前段階のものであること、また図1のa片とd片、c片とe片に文様の重複が認められることから未成品の破片が複数出土していると判断できました。もし大会会場(おそらく盾津飛行場)で受け取ったものが何らかの理由で奈良まで運ばれて土に埋まったのであれば、釉薬がかかった完成品の破片となるはずですし、複数個受け取ったことも通常は考

昭和十二年八月十六日
大正毎々全国版

國産を誇つて

ずらり勢揃ひ

盾津飛行場の壯觀

第二回全日本航空飛行競技大會は、いよ／＼十七日から開かれるが、會期迫つた十五日、晴れの大會をめぐす参加ソアラ一機全部が盾津飛行場に勢揃ひ、在席本社機師士の指揮で組立を終了したがゲツピソデン二機を除いて全部國産グライダーで力強い進歩の跡を見せ午後三時から飯塚、下山兩航空官、

早川、關口兩技手立會の上、さきき選信負に試作した前田式六甲二型機、小田清空士を本社松下機が曳航、テスト飛行を行ひ好成绩を収めた
なほ同大會の非常時制参加章が出來上つた、從來の金屬製品を廢し國策用機代用品時代の氣流に乗つて陶磁器を採用するとになり生駒賣店に特別注文して



調製させたが章牌は徑五寸六分丸の掛額仕立赤膚焼の遊好みで

中央に裸身の女神が漢々たる白雲に翼を張つて快翔してゐる新鮮な構圖である。寫眞は参加章

図 11 二代松田正柏によるスクラップの一部（「裸身の女神」は記者の勘違いか）

えにくいのではないかと考えます。つまり、未完成品が複数出土する状況からは、薬師寺の近辺にその制作工房が存在したと考えるのが自然です。様々な人から話を聞いたり、古い地図を探したりしているうちに、薬師寺北側、現在の西ノ京駅東の隣接地に以前赤膚焼の窯元があったことを知りました。赤膚焼は江戸時代後期から大和郡山藩によって奨励され、現在も奈良の名産として知られる陶磁器です。この西ノ京駅東の窯は大正年間に初代松田正柏が築窯したもので、その初代の急死

にともなって昭和12年(1937)に弱冠22歳で継いだのが二代松田正柏(1912~1993)です。時代的にはこの二代正柏と陶製プレートの時期は符合するのですが、確実に二代正柏が制作したといえる証拠の探索はかなり難航しました。

そうしたなか、二代正柏自身の手によるスクラップブックが残っているという情報が運よくもたらされました。二代正柏は、大変生真面目な性格だったようで、窯を引き継ぐ前後から晩年まで継続して自身の掲載記事をスクラップして整理し

ていたのです(図11)。国会図書館で検索しても出てこなかった大阪毎日新聞奈良版をはじめ、今はなき地方紙・業界紙の記事が目前に現れました。それらのおかげで、イカロスの陶製プレート制作の背景を詳細かつ具体的に知ることができました。

これらの記事をもとに考えられる制作背景は以下の通りです。昭和12年(1937)7月に日中戦争が始まると、日本は長い戦争の時代に踏み入っていきます。翌昭和13年(1938)4月の国家総動員法発布にともない、国を挙げて戦争に協力していく体制が整えられると、国内の金属資源は軍需産業へと優先され、非軍事の用途に対する金属材料の供給は制限されていきます。主催者から発注を受けた生駒時計店からさらに注文を受けた二代正柏は、金属製のメダルや賞牌を陶製品に置き換え、かつ金属製に劣らない芸術性の高いものを生み出すことで国に奉仕しようとイカロスの陶製プレートを生み出しました。二代正柏は他の大会の陶製プレートも積極的に制作を続けていたようで、その活躍は第1回・2回大会を主導していた大阪毎日新聞の紙上で繰り返し称賛され、地元紙である中和新聞や陶磁器窯業新聞などでも取り上げられていました。若い二代正柏はちょうど第2回大会の最中に徴兵されるのですが、持病が発覚して即日除隊となり、帰郷後も金属製品に劣らない芸術性の高い「陶器代用優良品」の制作に熱心に取り組みました。

以上のことから第1回大会以降の経緯をまとめますと、金属製メダルが準備された第1回大会の2か月後、盧溝橋事件勃発を契機として日中戦争が始まります。金属素材節約のため、翌年の第2回大会では金属メダルから陶製プレートに素材が変更され、収納箱も桐箱から紙箱にダウングレードされました。陶製プレートは、二代正柏が制作を担当し、その制作途中で生じた失敗品が窯元周辺に廃棄され、のちに造成などの要因で薬師寺の敷地内の土に混入、それらが発掘調査で掘り出されたというわけです。なお、第3回大会以降のメダルやプレートは現時点で確認されていません。

女学生とメダル

制作の背景や過程についてはほぼ決着がつきま

した。最後にこの陶製プレートの研究のきっかけとなった第1回の金属製メダルをなぜ当時の高等女学生が持っていたのかという謎にも迫りましょう。金属製メダルは第1回大会当時、羽衣高等女学校(現・大阪 羽衣学園高等学校)2年生だった種子さんが手元で大切に保管し、亡くなる前に娘のり子さんに託したものでした。前述したようにこの時期は航空スポーツとしてグライダーが推奨される世相ただだけでなく、昭和7年(1932)女性として初めて大西洋単独横断飛行を達成したアメリカ人飛行士アメリア・イアハートの活躍は世界中から賞賛と注目を浴び、昭和9年(1934)には西崎キクや馬淵テフ子が日本人女性初の海外飛行を達成するなど女性の航空業界における活躍が世界でも日本でも目覚ましい時代でもありました。1920年代から30年代の間に日本では約30人の女性が航空免許を取得したと言われていています。都会を中心に高等女学校の進学率も増加し、卒業後に就職する女性も増え、昭和6年(1931)にはエアガールと呼ばれた客室乗務員も日本で初めて登場しています。そうしたニュースに触れたであろう種子さんは、大いに刺激を受けたのではないかと想像します。地元の金岡グライダークラブに籍を置き、滑空機や滑空技術について学び、空への憧れを膨らませていたのでしょうか。大阪毎日新聞の記事によれば、第1回大会では東京と大阪からそれぞれ一人ずつ高等女学生が選ばれ、大会の補佐をしていました。その一人、大阪代表が種子さんで、記事では「高等女学校卒業後には飛行学校に進み、滑空士さらには飛行家になりたい」と将来の夢を語っています。記録には残っていませんが、おそらく第1回大会で大役を果たしたその労に対し金属メダルが授与されたのでしょうか。同時期、羽衣高等女学校は学校PRのために、パイロットを目指す女学生と友人たちの群像劇を映画「大空へ」として制作しています。モデルが種子さんであることは言うまでもありませんが、主人公を演じているのも種子さん自身で(図12・13)、ラストシーンでは友人らが見守るなかパイロット姿で水上飛行機(荻田氏のご教示によれば堺水上飛行学校所属の13式練習機)に乗り込んで颯爽と大空へ飛び立ちます(実際の操縦はプロパイロットによる)。在校生が飛行士を目指すこ



図12 映画撮影のためパイロット姿の種子さん

とが、当時の高等女学校においてポジティブに受け止められ、広報として活用されていることは注目できます。

おわりに

日中戦争開始後の国民精神総動員や国家総動員法発布により国家総力戦が謳われ、女性は銃後を守るべきものという考えが浸透していくと、次第に女性が航空スポーツや航空機に関わる機会は失われていきました。その後の太平洋戦争や続く戦後の混乱期など激動のなかで、種子さんが自身の夢をあきらめざるを得ない状況におかれたことが推察されます。しかし、種子さんがひとしれず大切に保管していた金属製メダルの存在こそが、今回の調査を進める上で重要な鍵となり、当時の女性と航空の関係を再発見する契機となったことは間違いありません。

奈良盆地のどこからでも見える生駒山ですが、戦前にグライダー大会が行われていたことは現在の地元奈良でもほとんど知られていません。薬師寺出土の小さな焼きもの片からスタートしたこの



図13 羽衣高等女学校のPR映画「大空へ」のワンシーン

調査の成果は、種子さんの金属製メダル、日本航空協会所蔵品、二代正柏のスクラップブックどれを欠いてもたどり着けないものでした。いずれも日本の昭和戦前期における航空スポーツの歴史とそれを取り巻く社会背景を物語る貴重な文化財と言えるかと思います。

また、考古学は単に古い時代の遺物を研究するだけでなく、近現代の歴史の解明にも大きな役割を果たすことができることも示せたかと思えます。研究者であるかないかを問わず、今後もこうした地道な調査と保存の取り組みが絶やさず続けられていくことが、日本の歴史を正しく理解し、未来へと伝えるために不可欠であるといえるでしょう。本文が、時代を問わず読者のみなさまの身の回りの文化財にも目を向けるきっかけになれば幸いです。

●主な参考文献

- ・渡辺一英 1943『滑空日本歴史写真輯』航空時代社
- ・薬師寺 2013『薬師寺 旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報Ⅰ』
- ・岩戸晶子 2021「薬師寺出土資料から見る近代史の側面—第88-21次・第103-23次・第500次」『紀要2021』奈良文化財研究所
- ・岩戸晶子編著 2023『イカロスの翼—薬師寺の発掘成果から見る近世と近代—』(平城宮跡資料館企画展図録)奈良文化財研究所

●図版出典

図1・2・5-8は岩戸2023より転載、図3・12・13は伊達の子氏提供、図4は奈良文化財研究所提供、図9は渡部1943より転載、図10・11は筆者撮影